POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第 58号　2005.9.22

発行
北海道ポーランド文化協会
〒011-0029
札幌市北区北29条西12丁目2－16
佐光伸一
電話・FAX　011-727-1520

ポーランドサイクリング連載最終回　鳴神雅史

おさらい

自転車で外国を走ってみたい、国境を越えてみたい、という願いを叶えるために春休みを使ってドイツ・ポーランド国境へやってきた。ベルリンから東へ行くこと約八十キロ、フランクフルト・オーデルとポーランド領スオヴィツツとの間に架かる国境の橋を超えて、ポーランドの大地を走り始めた。

次にリトアニアのヴィリニュスへ行くためにワルシャワからリトアニア国境のシエストカイという小さな村の駅で特急を待っていた。次の十六時発の特急が出るまで二時間以上もあるので、駅の周りを自転車で走ってみて駅に戻ると、「ヴィリニュス」と表示のある列車がホームから走り出そうとしている。僕の時計はまだ十五時なのに、駅の大時計を見ると十六時。ポーランドとリトアニアに時差があるのを知らなかった！この列車を逃すと無人の荒野で野宿することになる。運転手に手を振って止まってもらおうとしたが、首を横に振って無視された。列車は歩く程の速度で走りだしている。ホームの上もおかまいなしにチャリをこいで、客車の開いているドアの所に立っていた女性の車掌さんたちに「乗せて！」と行ったら非常ブレーキをかけて止めてくれた。「早く乗って！」とせかされながら低いホームから何とか自転車を引き上げて乗り込んだ。生まれて初めて走り出した列車を止めてしまった！

義足のおじさんと

6．ヴィリニュス

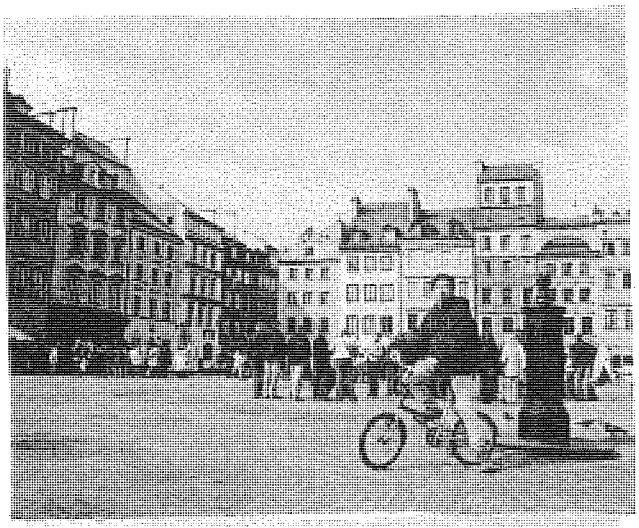
何とか列車に乗り込んだものの、車掌のオバちゃんに「自転車は袋に入れないと邪魔だよ」などとつっけんどんな対応をされるあたりが、ポーランドから、かつてのロシア文化圏である国に入ったのだなぁと思った。

「命のビザ」で有名なカウナスにも寄ってみたかったが、リトアニアではヴィリニュスにたった一泊だけした。ヴィリニュス駅前は一国の首都とは思えないくらい小ぢんまりとした雰囲気であった。小さい街だが坂が多くて、切り替えギアのない

小さな自転車では少し上り坂がきつかった。

「地球の歩き方」に乗っている安いユースホステルをやっとのことで探しあてて泊まることにした。ヨーロッパに来て思ったことだが、なぜこちらではユースホステルの部屋は男女相部屋なのだろう？女性客も気にする人がいると思うし、僕が自分で男でも、やっぱり隣のベッドに知らない女の子が寝ているとやっぱり緊張してしまう。そんなユースで、同室いたイタリア人のお兄ちゃんと、東京外国語大学の女の子と知り合った。イタリア君とは英語で話したが、やはりどちらかというと話し慣れたロシア語のほうが話し易いこともあり、会話がぎこちなかった。日本人の彼女はポルトガル語学科だが、卒業旅行なので今回はバルト三国と北欧めぐりだという。かなり久しぶりに日本語を話せて楽ちんだったのと、うれしくなったせいもあり、この日はヴィリニュス市内を一緒に観光することにした。さらに彼女と一緒だったお陰で、一人だと貧乏性なので絶対に入らない郷土料理のレストランにも行くことができた。よかったなぁ！

さて、次の日はヴィリニュスでも自転車は大活躍した。車道の路面は普通だが、歩道は舗装のコンクリートブロックが壊れてかなり走りづらい。しかも歩道に平気で駐車していてその駐車マナーもかなり悪くて、ドイツとはだいぶ違うなと思った。当初の想像どおり、東へ行くに従って道路の舗装の質、運転マナーなどが悪くなっていくことが実感できた。特に、車道と歩道の境目になる縁石が、タイヤが乗り上げられるように低くなっていないので、歩道に上ろうとする毎に自転車を止めて持ち上げなくてはならないのが不便だった。この縁石の不便さはモスクワと同じだなと思った。



旧市街にて

ワルシャワ中央駅

7．再びワルシャワ～クラクフ・・・自転車とのお別れ

旅の目的のひとつであったアウシュビッツ収容所を見学するために、ヴィリニュスからワルシャワへ戻り、そのまま同じ日にクラクフ行きの列車に乗った。

クラクフ駅に夜着くと、ここでもワルシャワの時と同じようにプライベートルーム(民宿)の客引きの人々が大勢いた。年配の婦人が英語で泊まっていかないかと案内してくれた。「ほかにユースホステルがあるから」とそっちの値段を言うと、同じ三十ズオチでいいよと言ってくれるので、こちらの民宿に泊まることにした。年齢や背格好が日本で働くぼくの母を思い出させ、この人も生活のために宿泊客を見つけるのにがんばっているんだなと思うと、こっちに泊まってあげようと思った。

クラクフ駅前から町の広場を抜け、その周りを環状に走る道路を渡ったあたりに彼女のアパートがあった。家族は彼女の年老いた両親とで三人暮らしらしい。おばあちゃんに「バルゾミ・ミウォ(はじめまして)」と片言のポーランド語を話したら、おじいちゃんに「スウハイ(ねえちょっと聞いてよ)。※#$&”@・・・(ポーランド語を喋ったよ！)」と喜んで話しているのが聞こえた。やはりポーランド語とロシア語は似ているので、少しだけなら分

かるようになってきたような気がする。ぼくには使っていない十畳くらいの部屋を貸してくれた。バストイレと台所は家族と共用で、その他にこの三人の居間があった。おじいさんとおばあさんは日中は家にいるようだけど、娘さんは昼間はどこかのオフィスへ働きに出ているようだった。

この五階建てくらいの古風なアパートは、おそらく築百年以上は経っていそうだった。貸してもらった家の鍵は、昔話に出てくるような、鍵穴から部屋の中を覗けるようなクラシックなタイプだったので感動した。しかしポーランドではあまり自転車が普及していないせいか、外に駐輪場はないので、自転車を担いで二階の部屋の中に入れておいた。

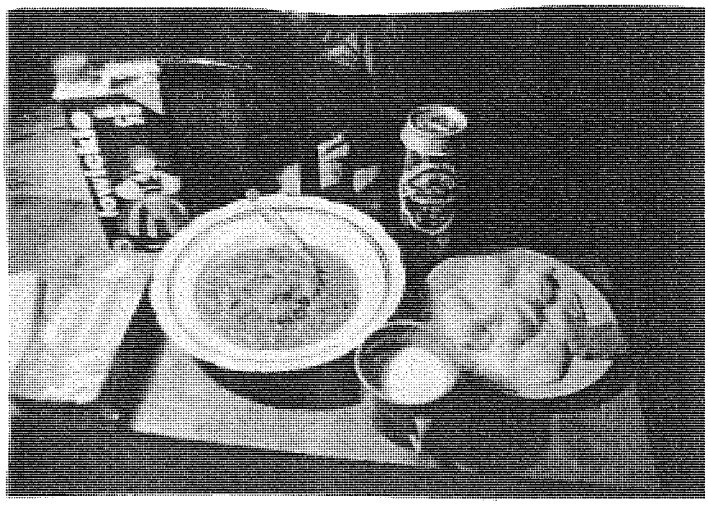
近くの二十四時間スーパーを教えて貰ったので、早速食料を買いに行って夕食を作った。ポーランドでは食料を買うたびに、物価が安いことに感謝した。この日は冷凍食品のビゴスと黒パン、それに普段は一人でなら飲まないビールを買ってみた。この前泊まったワルシャワのマレクさん家もそうだったが、ポーランドの台所のガスコンロはどこも自動着火でなくて、いちいちマッチで火をつけなくてはならないので、火傷しないようにコツがいる。暖めたビゴスは冷凍食品とは思えないくらい美味かった！

次の日は、クラクフから七十キロくらい西にあるオシフェンチェム市に日帰りで行ってきた。あの有名なアウシュビッツ収容所を見学するためである。民宿のママさんが、列車で行くよりも乗り合いバス(十人乗りくらいの小さなバン)で行ったほうが安いよと教えてくれたので、この日は自転車を置いていくことにした。なるべく多くの街を自転車で走ってみたかったが、狭いバスなので仕方がない。それでもたった七ズウォチ(約二百十円)でオシフェンチェム駅前まで行けた。ちょうど運転手さんがアウシュビッツ入口で下ろしてくれたので、迷わずに行くことができた。入口にはヨーロッパ各国のナンバーを付けた観光バスが止まっていた。驚いたことに、日本人の団体観光客もいた。日本からの直行便のないポーランドなのに、意外と多いのかもしれない。

オシフェンチェム市はものすごく小さな町で、駅前にも殆ど店らしきものは無いくらいの淋しい町だった。この日はオシフェンチェム収容所と、そこから二キロくらい離れたビルケナウ収容所を見て来たが、小さな町だからか連絡バスの便も少ないので歩いて移動した。

僕が行った日はちょうどイスラエルの高校生くらいの子たちが見学に来ていた。国旗を持つ子、ダビデの星のマークのついたTシャツを着ている子、など民族色にあふれる様相を呈していた。オシフェンチェム収容所とビルケナウ収容所ともにイスラエルの高校生たちが来ていた。修学旅行でここに来ているのかもしれない。印象的だったのが、女子生徒たちがある部屋に入った瞬間泣き出して顔をそむけてしまったことだった。そこの部屋には収容者たちの(長いのでほとんどが女性のだ

バベル城にて



クラクフでの夕食

と思うのだが)切られた髪の毛の山が展示されていた。

ちょうどこの旅行に出る前にイタリア映画「ライフ・イズ・ビューティフル」を観て収容所にも行ってみたくなったので、映画に出てきた光景とだぶって見えた。この目の前のガス室だった瓦礫は六十年くらい前は死体工場だったのだ。最期の瞬間には何を思ったのだろうと思いをはせた。自分が今こうして平和な時代に健康な体で生まれて、好きな国を旅行できることをとても感謝した。

収容所を一日がかりで見学してクラクフの民宿に帰ってふと気付くと、この短い旅が後半にさしかかった。そろそろ自転車をどうするかを考えなくてはならない。日本から持ってきたこの自転車は、本やら土産物を買って増えた荷物と一緒に持って帰るのはやはり重たすぎる。当初の計画通りなら、どこかで誰かにプレゼントするはずである。でも帰りの飛行機に乗るドイツのフランクフルトまで連れていこうか、と考えた。次に寄るチェコのプラハや、最後のフランクフルトでも自転車がないととても不便だろうと予想できたからだ。しかし、誰にも貰ってもらえなくて、その辺に放っていくことにだけはしたくない。そこで思い切って決めた。クラクフでは今回の旅で初めて同じ所で連泊することになっていた。例の民宿にはおじいちゃんとおばあちゃんが住んでいるのだが幸い自転車を持っていない。そんなことを考えながら部屋で夕食を食べた。よし！明日は自転車をあげることにしよう。

次の日はクラクフ市内を一日自転車で探検して歩いた。クラクフの街を適当に走っていると、旧市街から抜け出ていつの間にか社会主義時代に建てられたアパート街へ出た。街の中心部の華やかな商店街とも違った、普通の人々が暮らす何の変哲もない町にあるスーパーで買い物をして、庶民の暮らしが垣間見えた気がした。自転車の利点は小回りのきくことである。市電やバスを待つこともなく、次々と分かれる交差点を思うままにスイスイと好きな方角へ行けることだ。スーパーで買い物をしていると、五歳くらいの男の子とお父さんが一緒に買い物をしていた。おもちゃ売り場の前を通った時に男の子が勝手にミニカーをお父さんの買い物カゴに放り込んだのだが、お父さんが「今日は買わないんだよ」と元の棚に戻す光景がかわいらしいなぁと思って見ていたら、苦笑しているそのお父さんと目が合って、思わず二人で微笑んでしまった。言葉は通じないけれど、非言語的コミュニケーションを通して普通の生活をしている普通のポーランドの人と心が通じたような気がしてとても嬉しかった。短期の通りすがりの旅行者にしか過ぎないのに、観光地でない、ありふれた生活の息吹が感じられる地区へ来られたのも自転車があってこそである。自転車よ、ありがとう！お別れの前に、クラクフの旧市街の広場で休んだ時に、ありったけのチリ紙で自転車の埃を落としてやった。

その日の夜は、夜行列車でプラハへ行くことにした。民宿に荷物を取りに帰った時に、おばあちゃんしか居なかったけれど、「自転車をあげます」と言った。この際、意思を伝えるにはロシア語でも仕方ない。何故ここで自転車を置いていくことにしたのかを一生懸命ロシア語で説明した。「もともと盗まれても勿体無くないように、大学のゴミ置き場で拾った自転車を自分で修理して持ってきたこと。持って帰っても日本には自分の自転車があるからあまり使われなくなってまたゴミになってしまい自転車にもかわいそうなこと、等等」を話すと、おばあちゃんは「ドブジェ、ドブジェ」と繰り返していた。どうやら大体のところ僕の話は伝わったようだ。こうして自転車とはお別れして、夜のクラクフを後にした。

8．プラハ～フランクフルト・・・終わりに

次に寄ったプラハでは、自転車が無いのはやはり疲れるのを実感した。短い付き合いではあったが、あの青い折り畳み自転車がやはりいとおしい。プラハでは今回の旅で始

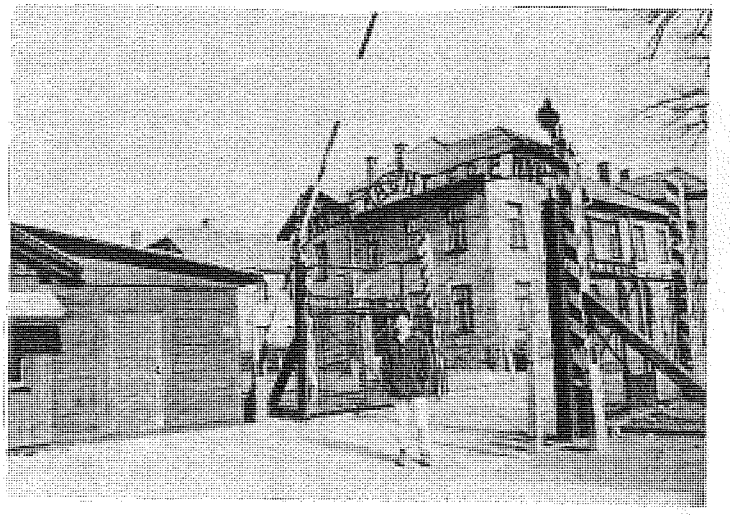
めて地下鉄を使った。たまには地下鉄もいいかなと納得したが。

プラハで一泊した後、夜行バスでフランクフルトに戻った。何故かとても懐かしい感じがした。この旅が始まった僅か十日ほど前に自転車で走り回ったはずなのだが、色々な所をまわって密度の濃い日々を過ごした後なので、とても長い時間が過ぎた気がした。

学生時代の長期休暇はこれで最期だろうと思うので、海外の自転車旅行も最初で最期になるだろう。しかし、今まで北海道はもとより日本中を自転車で走り回ってきたのが基礎編サイクリングだったと思う。道東や飛騨の山奥の峠で「次の集落まであと残り何キロ。日暮れまであと何分。食料と水の残りは・・・」とハラハラしながら走ったが何とかなってきたことで、かなり精神力が付いたと思う。今回のポーランドサイクリングは外国を走ること、言葉の通じないかもしれない所を行くこと、そして地図の情報（町の規模や道路の交通量といった自転車で走る際の不安を和らげてくれる情報）がどこまで信用できるのか分からない所を走るという意味で、今までのサイクリング技術の集大成となる応用編だったことは間違いない。

来年春には国家試験に通ったら、研修医生活が数年続くので海外はおろか国内サイクリングもできないだろう。長い長い学生生活でひとつ身に付いたことといえば、自転車旅行を通して容易には諦めない辛抱強さではないかと思う。朝出発する時に、「今日のコースは百七十キロだ。本当に着くかなぁ」という不安と、そんなコースを設定した自分を少し恨むのだが、一歩一歩進むことでいつの間にか目的地に着いているのである。例えば十時間くらいの長い手術が始まる時、「終わるまで飲まず食わずトイレに行かず立ちっぱなしで十時間かぁ」とうんざりしそうになるが、サイクリングでの経験が必ずや外科医になった時に活かされるだろう。いつか未来に、研修生活が終わって生活が落ち着いたら、オジさんになったぼくは、大きくなったぼくの子供や女房と家族できっとどこかの国を走っているでしょう。短い旅を長い連載にしてしまいましたが、飽きずに読んでくださった読者の皆様、ありがとうございました。

ベルリンにて



アウシュビッツ収容所

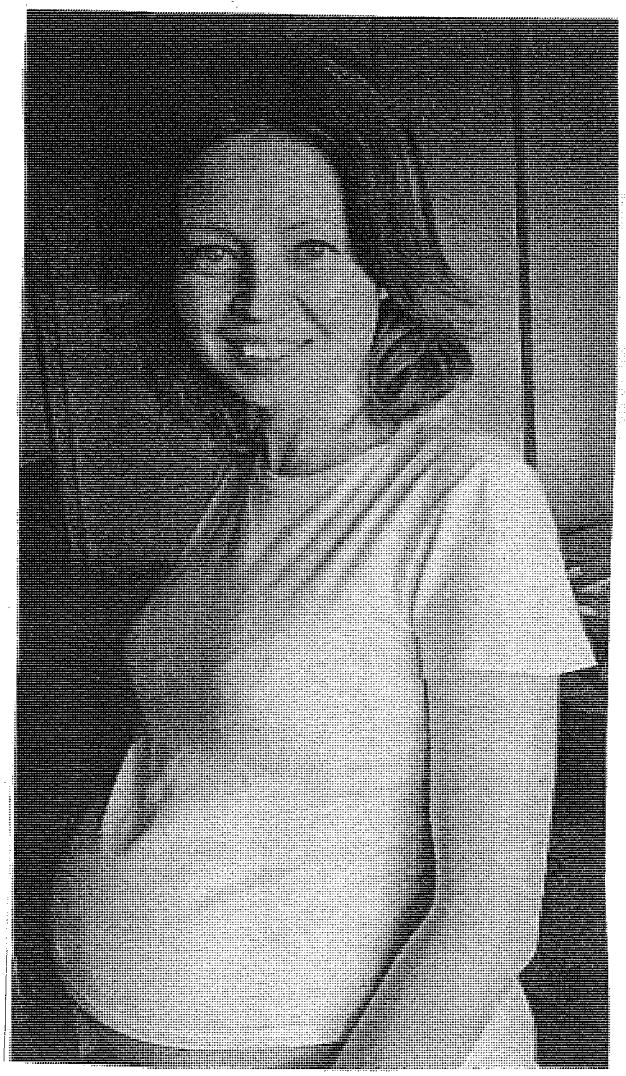
ポーランドの道産子　第二回

エディータ・ジェプカ

おさらい

ポーランド人の夫の留学により札幌にやって来てしばらく経った後、子供を作るという希望と決心がようやく生まれる。日本で出産することに不安があったが、妊娠後訪れたクリニックで医者から「あなた本当に生みたいんですか?」と質問されるような冷たい対応を受け、その不安は一層強まる。

「日本でなんか産みたくないわ!」「イヤよ!」初めて病院を訪れた後、私はこういう風にしか考えられませんでした。主人はいつものように私を慰めてくれます。「大丈夫だよ。知り合いに聞いたり、インターネットで調べたりして、いいお医者さんや居心地のいいクリニックを見つけようよ。」しばらくしてようやく日本にはふたつのタイプのクリニックがあると知りました。つまり産婦人科と婦人科です。それまでそんなことなど知りませんでした。最初に私たちが探し出したのは「間違った住所」、つまり婦人科のクリニックだったのです。だから多分お医者さんは少し不親切だったのでしょう。もうこれ以上ここに来ないようにそうやって私たちに分からせようとしたのかもしれません。でもどうして直接そう言ってくれなかったのでしょうか? 分かりませんが単にそんな性格の人だったのかもしれません。いずれにせよ妊娠した女性でこんなクリニックとこんなお医者さんのところに行きたがるひとなんていないに違いありません。私も行きたくありませんでした。だから一ヵ月後の次の検診までには知り合いに落ち着いて聞いたり、インターネットでいろいろなクリニックを探したりして自分たちの考えで一番いいところを選ぶ時間がありました。今回の「探索」では、札幌在住の女性がいろいろな病院での自分の体験を書いているインターネットのディスカッション・フォーラムを見つけました。簡単に言えば、そこでは病院や具体的なお医者さんを他の女性に勧めたり思いとどまらせたりしているのです。そのフォーラムを読み、日本で女性は麻酔を受けて出産することは稀で、出産の時、麻酔をしてもらえる病院は札幌には多くないと初めて知りました。私にはこのことは非常にショックでした。というのもヨーロッパやアメリカでは出産時の麻酔は非常に一般的で、およそ半分の妊婦が麻酔を利用しているからです。ポーランドでも同様で、出産時には麻酔を「希望」しそれを受ける(有償で)ことが出来ます。私は以前に一度も出産をしたことがなくそれがどんな痛みかも分からなかったので、麻酔を受けることが出来るところをえらびたいと思いました。ディスカッション・フォーラムのリストの中で他の女性に評判のよく、家の近所にあり、麻酔を受けられるとなると、残ったクリニックはたったひとつでした! やがてそこに出かけました。他に選択の余地がないという心理的な思い込みがそうさせたのかもしれませんが、その病院はすぐに気に入りました。入り口をくぐるとすぐに自分が病院ではなくてまるでホテルにいるのではという印象を受けました。清潔で、広々としていて、明るい色にあふれ、静かで、スピーカーからは落ち着いた音楽が流れ、接待も気持ちよく、このクリニックのことを良く言う患者さんもたくさんいました。お医者さんも若くて愛想が良く、外国人の訪問に驚いた様子もありませんでし



た。この病院ではよく外国人が出産しているようにも見えました。次の患者さんが列をなして待っているというのに、私の質問に辛抱強く答えてくれました。後で私は助産婦さんと話をすることになり、私にいくつか質問をして私の疑問にさらに答えてくれると教えてもくれました。助産婦さんの説明のなかでひとつのことだけが私にはショックでした。彼女は私の体重を量ったあと、何か自分のノートのようなものを見て、私はこの妊娠中に九キロ、最高でも十キロしか太ってはならないということでした。最初は笑顔でこのことを受け止めました。でも後になってこれが日本ではいかに大事なことなのか、どれほどきちんと管理しているかがわかりました。おそらく多くの女性が妊娠中に体重が増えすぎて、あとでその余分な目方を減らすのが大変だからでしょう。それ以外にも助産婦さんは話の間に私の頭に浮かんだ質問に答えてくれました。この会話のことをとてもよく覚えています。彼女はあまりにも親切だったので、こんなクリニックと彼女のようなひとの看護のもとでなら私はすぐにでも産みたいともうその場で彼女に言ったほどでした。

第５０回北海道ポーランド文化協会の報告

２００５年７月１６日（土曜日）北海道ポーランド文化協会第５０回例会としてポーランド料理講習会が札幌市男女共同参画センターの料理実習室で開かれました。講師は「ポーレ」の連載エッセー「ポーランドの道産子」の著者でおなじみのエディータ・ジェプカさん。メニューはGolapki(ポーランド風ロールキャベツ)とカッテージチーズ入りクレープでした。当日は2名のポーランド人を含む21名の方がお集まりくださいました。「「Golapki(鳩)」という名前の由来は、現在ではロールキャベツの中にお米が入っているが、ポーランドにお米がなかったときにカーシャの実を入れており、カーシャは鳩の好物だったので、このような名前になった」 とのエディータ先生からのお話から会は始まりました。料理が始まると通訳を介しての説明にもかかわらず、皆さん先生もびっくりするほど見事にポーランドの家庭料理を再現していました。料理後の試食会では予想以上の出来に満足し、大盛況のうちに会は終了しました。

北海道ポーランド文化協会では十二月ごろに今度はポーランドのケーキの講習会を予定しています。

次回も多くの皆さんの参加をお待ちしています。

★ポーランド風ロールキャベツ（4人分）
キャベツ1玉
豚ミンチ500グラム
米180グラム
玉ねぎ1玉
サラダ油、塩、コショウ、ローリエの葉

あらかじめご飯を炊いておく。
1．キャベツを洗いそのまま電子レンジへ入れる。6分レンジにかける。取り出し葉っぱを二枚はがしてから、もとのキャベツをふたたび6分電子レンジへ入れる。取り出して葉っぱを四枚はがしてから、もとのキャベツをふたたび6分電子レンジに入れる。葉っぱをキッチンペーパーの上で乾かす。
2．キャベツが電子レンジに入っている間に、ロールキャベツの詰め物を準備する。牛ミンチと米を混ぜる。玉ねぎ半分をおろし金でおろし、加える。塩小さじ3とコショウを少々加える。
3．キャベツの葉の芯と背を落とす。詰め物を葉の裏側に載せ、包む。
4．ロールキャベツをフライパンに載せ、ふたをして軽くいためる。
注意：キャベツの葉を巻き終わった部分を上にして焼くこと。後で移動しやすい。油がはねないように、フライパンを火からおろす。
5．大きな鍋に200ミリリットルの水と塩を小さじに半分入れる。たまねぎの残りを角切りにしてローリエの葉と一緒に入れる。
6．少し塩をして弱火で約1時間煮込む。

★カッテージチーズ入りクレープ（4人分）
○皮
小麦粉2カップ
牛乳2カップ
卵1個
サラダ油小さじ1
塩少々
○中身
カッテージチーズ2パック
卵黄2個
砂糖（小さじ6）
バニラエッセンス5・6滴
レーズン10個
マーガリン
好みでフルーツ・ソース、チョコレートシロップ、シュガーパウダーをクレープにかけてもおいしいです。
1．レーズンを柔らかくするためにお湯をかけ、そのままにしておく。
2．ボールに小麦粉を入れる。牛乳とサラダ油と塩を入れる。メレンゲでよく混ぜる。
3．別のボールにカッテージチーズを入れ、卵黄、砂糖、バニラエッセンス、レーズンを加え混ぜる。
4．フライパンでクレープを焼く。焼きあがったクレープに中身を入れ包む。
5．食べる前にフライパンで軽く炒め暖める。

会費の納入はお済みですか？

（2004年 10 月～2005年 9 月分）

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。
上記の年度分の会費の納入を宜しくお願いいたします。

《郵便振替口座》
02740 － 5 － 19735
北海道ポーランド文化協会
普通会員（年　額）　3,000円
維持会員（年額1口）5,000円
学生会員（年額）　1,500円

《会費振込銀行口座》
北洋銀行 大通支店
（普）301-0605084
北海道ポーランド文化協会
事務局長佐光伸一

「ポーレ」編集委員会
小笠原正明・越野剛
琴崎多美絵・小林 美保
佐光 伸一・鳴神雅史
三浦　洋
Tel/Fax 011－727－1520
〔連絡先〕 佐光

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 58 号（2005 年 9 月）

目　次

鳴神雅史「ポーランドサイクリング（３）」 1

エディータ・ジェプカ「ポーランドの道産子（２）」 6

〈第 50 回例会〉ポーランド料理講習会 [2005.7.16] の報告 7